

## 松山鏡（まつやまかがみ） / 邦楽落語

### 【主な登場人物】

正助　正助の嫁 - 光　尼寺の庵主　地頭　名主

### 【事の成り行き】

鏡というものを、誰も見たことのない越後の松山村の正直正助という男、四十二になるが、両親が死んで十八年間、ずっと墓参りを欠かしたことがない。

これがお上の目に留まり、孝心あつい者であるというので、青ざし五貫文のほうびをちょうだいすることになった。村役人に付き添われて役所に出頭すると、地頭が、何かほうびの望みはないかと尋ねるが、正助は、自分の親だから当たり前のことをしているだけだし、着物をもらっても野良仕事にはじゃまになるし、田地田畑はおとつつあまからもらったのだけでも手に余る、と辞退する。金は、あれば遊んでしまうので毒だからと、どうしても受け取らない。

困った地頭が「どんな無理難題でもご領主さまのご威光でかなえてとらすので、何なりと申せ」と、しいて尋ねると、正助、それならば、おとつつあまが死んで十八年になるが、夢でもいいから一度顔を見たいと思っているので、どうかおとつつあまに一目会わしてほしいと、言いだす。

これには弱ったが、今さらならんと言うわけにはいかないので、地頭は名主の権右衛門に「正助の父は何歳で世を去った」と、尋ねる。行年四十五で、しかも顔はせがれに瓜二つと確かめると、さっと目配せして、鏡を一つ持ってこさせた。

この中を見よと言われ、ひょいとどぞくと、鏡を知らない正助、映っていた自分の顔を見て、おやじが映っていると勘違い。感激して泣きだした。地頭は「子は親に似たるものをぞ亡き人の恋しきときは鏡をぞ見よ」と歌を添えて「それを取らせる。余人に見せるな」と下げ渡す。

正直正助、それからというもの、納屋の古葛籠(つづら)の中に鏡を入れ、女房にも秘密にして、朝夕「おとつつあま、行ってまいります」「ただ今けえりました」と、あいさつしている。

女房のお光、これに気づき、どうもようすがおかしいと、亭主の留守に葛籠をそっとのぞいて驚いた。これも鏡を見たことがないから、映った自分の顔を情婦と勘違い。嫉妬に狂って泣きだし「われ、人の亭主う取る面かつ、狸のようなツラしやがって、このアマ、どこのもんだっ」と、大騒ぎ。

正助が帰るとむしゃぶりつき、「何をするだっ、この狸アマっ」「ぶちやあがったなっ、おっ殺せえ」とつかみ合いの夫婦げんかになる。

ちょうど表を通りかかった隣村の尼さんが、驚いて仲裁に入る。両方の事情を聞くと尼さん、ようし、おらがそのアマっこに会うべえと、鏡をのぞくと「ふふふ、正さん、お光よ、けんかせねえがええよう。おめえらがあんまりえれえけんかしたで、中の女あ、決まりが悪いって坊主になった」